

ネオクラシカル・リアリズムの対外政策理論

今野茂充

はじめに

- 一 ネオクラシカル・リアリズムとは何か
 - (一) リアリスト間の論争とネオクラシカル・リアリズム
 - (二) 二世紀のリアリズム研究
 - (三) 定義と論理構造
- 二 分析レベルと変数をめぐる諸問題
 - (一) レグロとモラヴチックの現代リアリズム批判
 - (二) 批判への反論
- 三 歴史事象とネオクラシカル・リアリズム
おわりに

はじめに

近年、国際関係理論の研究状況は、多様化の様相をますます深めている。たとえば、かつてのように学界を二

分するような大論争が出現する気配はない一方で、国際関係や安全保障の理論を扱う学術誌の数は確実に増え続けている。⁽¹⁾ もちろん、競合する学派間の論争が消滅したわけではないが、全体としてみると、学派やアプローチによる棲み分けや研究の細分化が着実に進展しており、理論研究の全体像を把握することは、次第に困難になっているようにも思える。

研究の多様化という趨勢は、冷戦終結後のリアリズム研究においても同様である。攻撃的リアリズム (offensive realism) と防衛的リアリズム (defensive realism) の論争を軸とするリアリスト間の論争 (intra-realist debate) を契機に、若い世代の研究者が多種多様な理論を提示するようになり、リアリズム研究の射程を拡大させてきた。⁽²⁾ それと同時に、ハンス・モーゲンソーやアーノルド・ウォルファーズをはじめとする古典的リアリストの研究業績が再評価されるようになり、理論の簡潔性 (parsimony) と説明力のバランスについても、広く議論されるようになった。こうした潮流の中、国際システムレベルの要因に国内要因を統合して国家の対外政策や戦略的選択を説明するネオクラシカル・リアリズム (neoclassical realism) の理論研究と事例研究の蓄積が、⁽³⁾ 十年ほどの間で急速に進んでおり、⁽⁴⁾ 現在では、現代リアリズム (contemporary realism) の主要分派の一つとして、⁽⁵⁾ その存在感を確かなものにしていく。

本稿の目的は、ネオクラシカル・リアリズムの特徴を明らかにし、この学派の現状と課題を考察することを通じて、より優れた現代リアリズム理論を創造する準備を進めることである。本稿の議論の手順は、以下の通りである。第一に、冷戦終結後のリアリスト間の論争の経緯を確認しながら、ネオクラシカル・リアリズムの位置付けを明らかにし、その上で、この理論の特徴と因果メカニズムについて検討する。ここでは、ケネス・ウォルツが定式化した「国際政治の理論 (theory of international politics)」と「対外政策の理論 (theory of foreign politics)」の区別など、現代リアリズムの議論を理解する上での基本事項についても確認しておきたい。第二に、ジ

エフリー・レグロとアンドリュウ・モラヴチックによる現代リアリズム批判と、それに対するリアリストの反論を手がかりに、ネオクラシカル・リアリズムの議論と、リベラリズムや構成主義 (constructivism) といった競合学派の国内要因論との根本的な違いを指摘する。第三に、歴史学のアプローチとの相違や分析道具としての有用性という点に留意しながら、ネオクラシカル・リアリズムの事例研究の特徴について考察する。そして最後に、この学派の今後の重要課題を二つ提示することで、本稿を結ぶことにしたい。

一 ネオクラシカル・リアリズムとは何か

(一) リアリスト間の論争とネオクラシカル・リアリズム

リアリスト間の論争とは、冷戦終結以降、ウォルツのネオリアリズムを見直す動きが強まる中で顕在化した現代リアリストによる論争であり、ジャック・スナイダーの『帝国の神話』(一九九一年)の議論を契機に本格化したとされる。この本の中でスナイダーが行ったことは、拡張政策に関するリアリストの議論を、攻撃的行動を通じて安全保障を達成できると考える積極的リアリズム (aggressive realism) と、それを否定する防衛的リアリズムとに区別することであった。そして、自身とステイーヴン・ウォルトの議論を防衛的リアリズムに分類し、ジョン・ミアシャイマーの議論を積極的リアリズムに近しいとした上で、ウォルトの議論は両方の要素を持つと説明したのである。⁽⁸⁾

当時の学界では、国際システムレベルの理論であるネオリアリズムとネオリベラル制度論が主流学派として激しい論争を繰り広げる一方で、ネオリアリズムに批判的な論者による対外政策や大戦略の国内要因に関する研究が活性化し始めていた。⁽¹⁰⁾ こうした背景もあり、このスナイダーの研究は、リアリズムの国内要因論として多方面

の注目を集めたのである。もつとも、彼自身は国際システムの制約の重要性を否定しておらず、実質的には、ある種の国家が、システムの制約に反して過剰拡張政策を実施する理由を国内要因に求めただけであった。⁽¹¹⁾ しかしながら、国際システムの優位を明示的に論じなかったため、当時の北米の学界では、彼の議論は「伝統的な内政理論 (Imperialist) の再声明」の一例として認識されることが多かった。⁽¹²⁾ こうして、リアリスト間の論争の初期段階において、分析レベルの問題に関心が集まるようになり、リアリズムへの国内要因導入の是非という論点が、研究者の間で強く意識されたのである。

ところが、一九九〇年代中盤になると、現代リアリストの間で国家利益（もしくは国家の動機）に関する仮定という問題が強く意識されるようになり、ほどなくして攻撃的リアリズムと防御的リアリズムの論争の最大の争点となった。そこで重要な役割を果たしたのが、ランドール・シュウエラーの研究である。シュウエラーは、ウォルツやウォルトの理論の現状維持バイアスを指摘し、リアリズムに現状打破国家 (revisionist state) の視点を取り戻すべきだと主張した。そして、強大な国家に直面した際、ある種の現状打破国家は、ネオリアリズムの諸理論が予測する均衡化 (balancing) ではなく、バンドワゴン (bandwagon) 戦略を選択するという論理を示したのである。⁽¹³⁾

この国家利益の仮定に関して、攻撃的リアリストと防御的リアリストは、国家が生き残っていくためにはどの程度のパワーが必要なのか、という問題をめぐり対立を深めた。この点に関する攻撃的リアリストの見解は、安全を確保するためにどの程度のパワーが必要なのかを確信することはできないため、安全保障を追求する最良の方法はシステムの中で最強の国になることだ、というものである。⁽¹⁴⁾ つまり、強くなればなるほど国家はより安全になると考えたのである。こうして、攻撃的リアリズムの中の国家は、相対的パワーの最大化を目指す主体 (power seeker) として仮定されることになった。この学派の代表的論者であるミアシャイマーは、「世界政治に

において現状維持国家を見つけることは難しい」とも論じている。⁽¹⁵⁾

一方、防衛的リアリストは、必要以上にパワーを求めることに對して否定的な見解を示している。その理由は、他国に不必要な脅威を与えることで、かえって自国に對する対抗同盟を誘発するなど、自滅的な結果を招く可能性が高いと考えるからである。したがって防衛的リアリストは、「国家の最大の関心事は、パワーを最大化することではなく、システム内での地位を維持すること」にあると考え、⁽¹⁶⁾ 理論の中では、国家を安全保障に必要な程度のパワーのみを求める主体 (security seeker) として仮定している。なお、この時期にこの学派の牽引役とされたのは、チャールズ・グレイザーやステイヴン・ヴァン・エヴェラといった研究者である。ウォルツも防衛的リアリストに分類されることが多かったが、どちらかという二次的な扱いであった。

ここで、リアリスト間の論争が、「国際政治の理論」と「対外政策の理論」の双方の範囲で進展していたことにも少し触れておきたい。「国際政治の理論」とは、国際情勢や国際的な出来事の帰結を、国際システムレベルの要因 (相対的なパワーの分布など) から説明する理論であり、ウォルツの議論では、各国の対外政策の決定過程や動機・意図などを分析する「対外政策の理論」と厳密に区別された。⁽¹⁷⁾ もともと、攻撃的リアリズムや防衛的リアリズムの範疇に「対外政策の理論」を含めることの是非については、現代リアリストの間でも見解が分かれ、結局、一九九〇年代を通じて、学界で合意が形成されなかったことにも言及しておく必要がある。⁽¹⁸⁾

このように概念規定に曖昧さが残る中で、一九九〇年代後半以降、次世代のリアリズムを総称すべく、さまざまな名称が提示された。そして、結果的に学界に定着したのは、一九九八年にギディオ・ローズが提唱したネオクラシカル・リアリズムであった。⁽¹⁹⁾ ローズはまず、ネオクラシカル・リアリズムを明示的に国際システム要因と国内要因を一体化した「対外政策の理論」であると定義した。そして、各国の対外政策は国際システムの制約に大きく規定されるが、システムの制約は国内の媒介変数によって変化するため、その影響は直接的ではなく複

雑であると論じた⁽²⁰⁾。その上で、ファリード・ザカリア、トマス・クリステンセン、ウイリアム・ウォルフオース、シウエラーの四人の研究を、ネオクラシカル・リアリズムの研究として分類したのである⁽²¹⁾。

しかしながら、このローズ論文の刊行後、ネオクラシカル・リアリズムの名がすぐに学界に定着したのかという点、そうではない⁽²²⁾。一九九〇年代末以降、ネオクラシカル・リアリズムとは何を意味するのかという点について活発な議論が交わされたが、大きな問題は、ネオクラシカル・リアリズムの研究と、既存の国内要因を用いる攻撃的リアリズムや防御的リアリズムの研究とを区別する基準が曖昧であることであった。結局、現代リアリズムの諸分派の説明対象・研究範囲が整理され、研究者の間にある程度の共通理解が成立するまでには、さらに五年以上の時間を要したのである。

(二) 二一世紀のリアリズム研究

ミアシャイマーの『大國政治の悲劇』が刊行された二〇〇一年頃には⁽²³⁾、リアリスト間の論争の構図や主要な争点は、学界で広く認識されるようになっていた。また、ミアシャイマーがウォルツのネオリアリズムを防御的リアリズムの代表格と位置付けたこともあり⁽²⁴⁾、以後の研究ではこうした理解も一般的となった⁽²⁵⁾。そして、徐々にではあるが、国際システム要因に加えて国内要因を考慮する現代リアリズムの研究をネオクラシカル・リアリズムとして分類することが一般的となり、冒頭でも述べたように、現在では現代リアリズムの有力な分派の一つとみなされている。

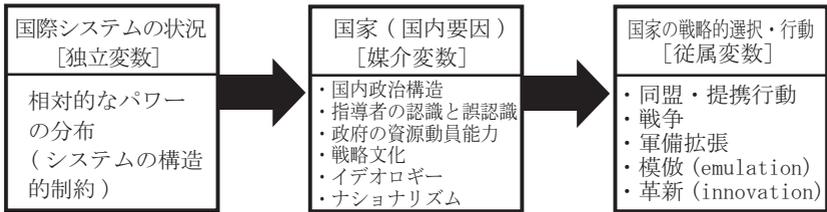
ところで、ネオクラシカル・リアリズム以外のリアリズム研究には、近年どのような進展が見られたのか。次の議論に移る前に、ここで簡単に確認しておこう。第一に、攻撃的リアリズムと防御的リアリズムに関する研究である。論争としては膠着状態に陥り、どちらかといえば、新たな研究を開始する際に比較対象として言及され

ることが増えたが、それぞれの理論を修正する研究や重要な論点を再検証する研究は今も続いている。主要な研究としては、コリン・エルマンによるミアシャイマーの攻撃的リアリズムの修正、キア・リーバーによる攻撃・防衛理論 (offense-defense theory) の欠陥の検証、内的均衡化 (internal balancing) としての軍事的模倣 (military emulation) に着目したジョアン・レセンデ＝サントスによるウォルツのネオリアリズムの改良などがある。⁽²⁶⁾

第二に、古典的リアリズムの復権である。リアリスト間の論争の中でも古典的リアリズムの視点は再評価されているが、それとは別に、近年、政治思想としてのリアリズムの伝統を再評価・再解釈する研究が非常に盛んになっている。中には、古典的な業績だけではなく、ウォルツの考え方も比較対象に加える研究もある。⁽²⁷⁾ 研究の視座やリアリズムに対する姿勢は様々であるが、たとえば、ブレント・ステイールが「内省的リアリズム (reflexive realism)」に分類する研究では、古典的リアリストがパワーと慎重さの重要性を強調するだけではなく、パワーの行使を抑制することや倫理と政治の問題について内省的に考えることの重要性を認識していたことが再評価されており、彼らの思索から国際政治における実践的な倫理観を導き出すことも試みられている。⁽²⁸⁾

なお、研究の個別テーマとしては、周知のように、一極システムや一極時代のアメリカの大戦略に大きな関心が寄せられた。⁽²⁹⁾ また、軍事同盟や大規模な軍備拡張によるハードな均衡化 (hard balancing) と、それらを伴わないソフトな均衡化 (soft balancing) を区別する試みや、世界史において勢力均衡が正常に作動しなかった事例に関する研究も進展した。⁽³⁰⁾ これらの研究も、現在の世界においてアメリカに対する軍事的均衡化が存在しない理由や、アメリカ主導の一極システムの持続性と安定性の問題など、北米の理論家の時事・政策上の関心との関連が深い。

図 ネオクラシカル・リアリズムの因果メカニズムの典型例



(三) 定義と論理構造

それでは、ネオクラシカル・リアリズムとは具体的にどのような理論なのか。論者によって重点の置き所が異なるため、厳密に定義することは容易ではないが、現在の学界における共通理解は、おおむね以下のようにまとめることができよう。ネオクラシカル・リアリズムとは、ネオリアリズムの国際システムの制約に関する洞察を犠牲にすることなく、対外政策の実施を制約する複雑な国家・社会関係を単純化した形で組み入れた理論であり、基本的には、国際システムの状態(相対的なパワーの分布など)を独立変数、国内要因を媒介変数、対外政策の決定や戦略的選択を従属変数とする、現代リアリズム理論である。攻撃的リアリズムや防衛的リアリズムと同様、ネオクラシカル・リアリズムという単一の理論があるのではなく、さまざまな理論の集合体である。³¹⁾

同じような外的制約に直面した諸国家(あるいは、同一国家であっても異なる時代)の対外政策の異同を説明することを目指す理論であり、「ネオクラシカル・リアリストの仮説は、国際システムの命令(imperative)に対する、特定の国家の外交的・経済的・軍事的対応を説明しようが、こうした対応のシステムレベルでの帰結を説明することはできない」と理解される。³²⁾つまり、ウォルツの分類に従えば、「対外政策の理論」であって「国際政治の理論」ではないということになる。³³⁾

単なる内政理論との違いは、明示的にせよ暗示的にせよ、すべてのネオクラシカル・リアリズムの研究が、国際システムに関する考察を分析の出発点としている点

である。異なる文脈で書かれたものではあるが、アーロン・フリードバーグによる、「構造的な考察は、分析の結末というよりも、国際政治の分析を開始するにあたり有益な視点を提供する。たとえ構造が存在し、それが重要だと認めるとしても、政治家がどのように国内の反対勢力を掌握するかという問題が残っている」という記述は、ネオクラシカル・リアリストの問題意識を端的に示しているといえよう。³⁴⁾

このようにネオクラシカル・リアリストは、自分たちの議論がネオリアリズムと矛盾するとは考えておらず、長期的には、国際システムの制約が国家行動の決定要因になるとも考えている。しかしながら、政府の能力や権威が不十分で政策の実施に必要な資源を動員できない場合、政策決定に拒否権を持つ利益集団や有力者が国内に存在する場合、あるいは政府の政策に対する国内世論の反対が極めて高い水準にあるような場合において、国際システムの制約に国家が対応できない状況があることを、彼らは理論の射程に入れていたのである。³⁵⁾

こうした状況を説明する際、どのような国内要因を変数として採用するかは個々の研究によって異なっている。たとえば、シュウエラーの過小均衡化 (underbalancing) に関する研究では、①外的脅威や戦略的調整 (対応策) などに関するエリートの合意、②政府や政治体制の脆弱性の程度、③社会の結束度、④エリートの結束度、という四つの国内要因が、国際システムの規定どおりの均衡化の実施 (特に軍備拡張による内的な均衡化) を妨げる変数として提示されている。³⁶⁾ また、コリン・デュエクによるアメリカの戦略文化と大戦略の変遷に関する研究では、国内の戦略文化が大戦略や対外政策の形成・変更・実施の過程に大きな影響を及ぼすことにより、国際環境の変化と国家行動との間に重大な時間差が生じる場合があることが指摘されている。³⁷⁾

さらには、威信やパワーを失うことへの恐れが、本来不必要であるはずの軍事的介入へと国家を駆り立てるといふ議論も存在する。ジェフリー・タリアフェロは、心理学のプロスペクト理論を援用したリスク均衡理論 (Balance of risk theory) を提示した上で、大国の周辺 (periphery) への介入行動は、利得のためではなく、損

失回避のための行動であると説明した。⁽³⁸⁾そして、二〇〇一年の同時多発テロ事件以降、ブッシュ政権が対テロ戦争を開始し中近東への介入を深めた理由についても、安全保障上の差し迫った脅威が存在したからではなく、ならず者国家や国際テロ組織による大量破壊兵器の獲得と使用のリスクを避けるという動機が強かったからだと言明している。⁽³⁹⁾

二 分析レベルと変数をめぐる諸問題

(一) レグロとモラヴチックの現代リアリズム批判

ここまで見てきたように、冷戦終結後の現代リアリズム研究は、パラダイム内部で多様な理論を競い合う形で発展してきた。しかし、このような状況に対して、現代リアリスト以外の理論家の多くは、控えめにみても好意的ではない姿勢を示した。一九九五年の段階で、リチャード・ネッド・ルボウが、「リアリズムの諸理論の相容れない予測が、リアリズムを反証することを難しくしている。ほとんどすべての結果は、ある種のリアリズム理論とは一致しうる」と論じているように、⁽⁴⁰⁾現代リアリズムを批判する論者は、リアリスト間の論争の進展に対して強い危機感や反感を抱いていたのである。

こうした現代リアリズム批判は一九九〇年代末にはピークに達したが、その中でも特に二つの論考が学界で大きな注目を集めた。一つは、科学哲学者イムレ・ラカトシュが考案した「科学的研究プログラムの方法論 (Methodology of Scientific Research Programme: MSRP)」の評価基準を用いて、リアリズムを後退的研究プログラムだと批判したジョン・ヴァスケスの論文である。⁽⁴¹⁾

もう一つは、国内政治や認識などの変数を取り入れる現代リアリストの研究は、もはやリアリズムではない、

という議論を展開したレグロとモラヴチックの論文である。⁽⁴²⁾ 後述するように、この論文には論理の強引さや先行研究の理解などの面で大きな問題があるが、ネオクラシカル・リアリズムと競合学派の国内要因論との相違を考察する上で格好の材料となるため、以下では少し紙幅を割いて、この論文の概要とそれに対するリアリストの反論について検討してみたい。

レグロとモラヴチックの議論は、現代リアリストが、伝統的に競合学派が扱ってきた変数を組み入れることで、ウォルツの理論から逸脱する現象を説明することへの批判から始まる。彼らは、多くの現代リアリストの議論の中で、物質的なパワーよりも、国家の選好、信条、国際制度といった要因が重視されると主張し、競合パラダイムの仮定や因果メカニズムを取り込む形でリアリズムが拡大していることを問題視している。⁽⁴³⁾ そして、リアリズムの理論的の中核がリアリズムの擁護者によって損なわれているとの認識を示した上で、現在の方向とは逆に、リアリズム・パラダイムを中核的仮定 (core assumption) に基づく限定的な形に再定式化しなければ、国際関係理論の分野で、健全な理論的論争や経験的研究の進展を望むことはできないと論じている。⁽⁴⁵⁾ したがって、彼らの観点から考えると、中核的仮定に矛盾しているか、無関係な補助仮定 (auxiliary assumption) を用いて、ネオリアリズムでは説明できない事象を説明しようとすることは、理論の正確性や信頼性を弱め、リアリズムの一貫性 (coherence) を傷つけることになる。また、他のパラダイムとの区別を難しくするので、弁別性 (distinctiveness) と⁽⁴⁶⁾ いう面でも望ましくないということになる。

それでは、レグロとモラヴチックのいうリアリズムの中核的仮定とは何か。彼らは、以下の三つを示している。第一に、リアリズムが想定するアクターは、アナキーの下で、合理的かつ一元的に行動する政治的ユニットであること。第二に、国家の選好は固定されていて一様に対立的な目標を持っていること。そして第三に、国際構造において物質的能力が最も重要な要因であることである。⁽⁴⁷⁾ また、彼らがリアリズムと競合するパラダイムとし

て提示しているのは、①国際制度、規範、情報の役割を強調する制度主義者パラダイム、②国内もしくはトランスナショナルな国家社会関係に基づく国家選好のバリエーションを強調するリベラル・パラダイム、③集団的信条や観念を強調する認知 (epistemic) パラダイム、の三つである。⁽⁴⁸⁾

この批判の中でとりわけ大きな問題とされているのは、多くの防衛的リアリストとネオクラシカル・リアリストの議論には、レグロとモラヴチックが示すリアリズムの中核的仮定の一部 (アナーキーと合理性) しか含まれていないばかりか、むしろ非リアリズム・パラダイムの中核的仮定と一致しているのに、リアリズムを称していることである。⁽⁴⁹⁾ たとえば、前述したスナイダーの研究は、通常、防衛的リアリズムに分類される。しかし、レグロとモラヴチックによれば、この研究は近代化の過程における国家社会関係の変化が対外政策に強い影響を及ぼすことを指摘する古典的リベラルの分析であり、その中核的仮定は民主的平和論 (democratic peace) と同じである。⁽⁵⁰⁾ また、ネオクラシカル・リアリズムも、リアリズムの中核的仮定に違反する一方で、国内制度や観念といった非リアリズム要因を借りてくることで理論に国内の選好を包摂しているため、もはやリアリズムではないとされている。⁽⁵¹⁾

このように、レグロとモラヴチックは、リアリズム概念が無節操に拡大していることを批判した上で、パラダイムの中核的仮定と理論の名称を一致させるべきだと、この論文の中で繰り返し述べている。そして、スナイダーの議論だけではなく、ジョセフ・グリエコの相対利得論⁽⁵²⁾、ヴァン・エヴェラの戦争原因の理論⁽⁵³⁾、ザカリアやシユウエラーの国家拡張の理論なども、リベラル・パラダイムの一部とみなすべきだと論じている。⁽⁵⁴⁾ つまり、リアリズムを彼らが示す中核的仮定に基づく形に制限した上で、そこから外れる防衛的リアリズムやネオクラシカル・リアリズムの研究を、リアリズムではなく、リベラルなどの競合するパラダイムに分類すべきだと主張しているのである。

(二) 批判への反論

以上のようなやや極端にも思える批判に対して、リアリストの側からも数々の反論がなされたが、ここでは三つの点に絞って検討してみよう。第一の点は、レグロとモラヴチックが、「力の現実を無視した場合の帰結」という、リアリズムの重要な視点を正確に理解していないことである。「国家は相対的パワーの変動を認識して対応するべきであり、指導者が力の現実を無視した時には悲惨な結末になる」という基本認識は、シウエラーが指摘するように、リアリストの議論の中でも最も重要な特徴の一つである。⁽⁵⁵⁾つまり、リアリストであれば、力の現実に反する非リアリズム的行動をとることのリスクを重く受け止め、構造的制約からの逸脱が大きくなればなるほど、国際システムが国家に課す懲罰も厳しくなると考えるが、リベラルや構成主義者は、通常、国際システムが国家に対して深刻な物質的制約を課すとは考えないのである。⁽⁵⁶⁾

第二の点は、彼らが提示する研究パラダイムの定義と分類に問題が多いことである。たとえば、タリアフェロが指摘するように、古典的リアリズムは合理性を中核的仮定とはしていないし、⁽⁵⁷⁾レグロとモラヴチックがリアリズム・パラダイムの代表作と位置付けるウォルトの『国際政治の理論』においても、アクター（国家）の合理性は仮定されていない。⁽⁵⁸⁾また、シウエラーが論じているように、レグロとモラヴチックの定義に従うと、ウィルソン大統領の集団安全保障構想や国際統合論なども、リベラル・パラダイムから除外されてしまうことになってしまふ。⁽⁵⁹⁾さらには、レグロとモラヴチックによるパラダイムの定義と分類は、学界において一般的であると言いきなり、⁽⁶⁰⁾ウオルフォースも指摘しているように、特に認知主義を独立したパラダイムとして扱うことは非常に珍しい。

第三の点は、彼らのパラダイムの定義の仕方からもうかがえるように、必要以上にリアリズムを矮小化させよ

うとする姿勢が強いことである。たとえば、国益追求のために他国に影響力を行使することや、パワーや利益を重視することは特別なことではなく、様々な学派が扱うべきテーマだと論じる一方で、古典的リアリズムの研究や思想的伝統を無視して、リアリストは観念や国内政治を扱うべきでない（扱えばリアリストではなくなる）と主張している。たしかに、パワーや利益の問題はリアリストだけが扱うテーマではないかもしれないが、それと同様に、観念や国内政治の問題も特定のパラダイムに属する理論のみが扱うテーマではないと考える方が自然であろう。⁽⁶²⁾

レグロとモラヴチックは、『インターナショナル・セキュリティ』誌上での再反論の場においても、「近年のリアリズム理論の発展と、マイケル・ドイルやブルース・ラセットのリベラル研究、ロバート・コヘインやリサ・マーティンの制度主義アプローチ、イアン・ジョンストンやピーター・カツツェンスタインの認知分析を区別するものは何もない」と同じ主張を繰り返している。⁽⁶³⁾ しかしながら、彼らのように分析レベルや変数の項目のみから研究パラダイムを定義することは、過去の蓄積を無視した乱暴な議論だといわざるを得ない。なぜなら、理論の構築方法は世界観や思想の違いによっても変化するため、同じような変数を扱っていても理論の中で与えられる意義や役割は一樣ではないからである。

実際のところ、レグロとモラヴチックが主張するほどには、ネオクラシカル・リアリズムとリベラリズムの諸理論を区別することが難しいとは思えない。たとえば、民主的平和論者であれば、相対的な国力の格差に関係なく、民主主義国家同士が戦争する可能性は極めて低いと考えるが、ネオクラシカル・リアリストはそうは考えないだろう。あるいは、典型的なリベラルであれば、ヨーロッパの民主主義国がアメリカの優越に対して軍事的均衡を試みるというシナリオを想定することはないと思われるが、ネオクラシカル・リアリストは、こうしたシナリオのことも仮想せずにはいられないだろう。⁽⁶⁴⁾ ネオクラシカル・リアリズムの国内要因（変数）は、リアリズム

ムの中心的課題であるパワーの問題に取り組むために設定されているのであり、国際政治の性質を悲観的にとらえ、国家間の力関係の重要性を強調する伝統的な世界観にも反しない形で理論に組み込まれているのである。⁽⁶⁵⁾

現代リアリズムの研究の拡大が国際関係理論の健全な発展を妨げかねないとする、レグロとモラヴチックの主張を支持する研究者は、現在でも少なくない。しかし、本当に理論研究と事例研究の健全な発展を考えているのであれば、彼らのようなトリッキーな方法で批判するよりも、理論の因果論理を精査したり、事例研究の精度を検証したり、同じ事例を現代リアリズム以外の理論で説明することによって、国際政治の分析道具としての有用性という観点から反論することの方が、よほど生産的だと思えてならない。

三 歴史事象とネオクラシカル・リアリズム

ここまで、ネオクラシカル・リアリズムの理論的特徴を中心に検討してきたが、次にこの学派のもう一つの大きな特徴である事例研究について少し検討したい。ここ十数年の間に、ネオクラシカル・リアリストによって刊行された研究書を並べると一目瞭然であるが、事例研究の重視、特に重要な歴史事象の中から事例を選択し新しい解釈の提示を試みることは、この学派の研究の顕著な特徴となっている。⁽⁶⁶⁾とはいえ、当然のことではあるが、ネオクラシカル・リアリストは歴史家と同じように歴史事象を見ているわけではない。とるに足らない事実を大量に集めるだけでは意味がないことや、⁽⁶⁷⁾集めた事実や情報を何らかの形で整理しながら研究を進めていく点では一致しているが、たとえば、問題意識の育て方、研究の目的、説明もしくは叙述の方法、一般化への関心など、多くの点でネオクラシカル・リアリストと歴史家のアプローチは異なっている。以下では、こうした相違を踏まえた上で、ネオクラシカル・リアリズムを用いて歴史事象を分析する意義について考察し、この学派の諸理論を

用いると、何ができて何ができないのかを検討したい。

一般的に、歴史家は過去の事象の過程だけではなく、それらの事象に関係する主要な指導者の思考過程をたどることに強い関心を持っている。途方もない困難に直面した政治指導者が、具体的にどのような問題で苦悩し、どのような方策を編み出して難局を打開したのかを、綿密な資料調査を通じて再構成していくことは知的刺激に満ちた作業であるが、歴史家が好むのはまさにこのような仕事といつてよいだろう。それに対して、ネオクラシカル・リアリストは、個々の指導者の思考過程を細やかにたどることよりも、指導者の戦略的選択に影響を与える国際環境、国内要因、指導者の心理的バイアスなどに関心を持ち、その中から因果関係を抽出し、体系化することに強い意欲を持つことが多い。

また、ネオクラシカル・リアリズムの事例研究では、独立変数（国際システム）から媒介変数（国内要因）を経て、従属変数（戦略的選択）に至る一方向の流れから歴史事象が説明されることが多いが、多くの歴史家は、ジョン・ギャデイスも指摘しているように、そもそも物事を独立変数や従属変数に換算して考えておらず、変数間の相互依存を前提に議論を進める傾向が強い。⁶⁸このように大きな相違があるため、歴史家の中に、ネオクラシカル・リアリストの研究方法を乱暴だと感じる論者も少なくないことは、容易に想像することができよう。

とはいえ、歴史家にとってネオクラシカル・リアリズムの理論が無用の長物かという点、必ずしもそうではない。マーク・トラクテンバーグも指摘しているように、優れた理論研究には、国際政治の基本問題の精髓が含まれているため、歴史家が特定の問題に取り組む際に、重要な手引きになることもあるからである。もちろん、理論は歴史の実証研究の代わりにはならないが、核時代の国際政治の研究を開始するにあたり、トマス・シエリングやバーナード・ブローディの理論研究が有用であるように、研究者がどのような「問い」に焦点を当てるべきかを考える際に理論が役立つことは多い。⁶⁹あるいは、研究の途中で、理論家の主張に誤りがあるという結論に至る

ことも当然考えられるが、トラクテンバーグも論じているように、その結論に至った思考の過程自体が、歴史家の研究にとって有益な視点を提供する場合もあるのである。⁽⁷⁰⁾ こうしたことを考えると、歴史家にとっても、ネオクラシカル・リアリズムを用いて歴史事象を俯瞰することの意義は決して少なくないだろう。

それでは、ネオクラシカル・リアリストの事例研究は、歴史事象のどのような側面を説明するのに適しているのか。ここでは簡潔にはあるが、二十世紀初頭のイギリスの外交戦略の転換を例に検討してみよう。米独の台頭などの国際環境の変化を受けて、十九世紀以来の孤立主義路線からの展開を余儀なくされたイギリスが、英独同盟の模索や日英同盟の締結を経て、フランスやロシアとの協商関係を構築するに至った経緯はよく知られている。このイギリスの戦略転換の経緯について、歴史家ジョン・グレンヴィルは、以下のように論じている。

「実際にはマスター・プランなどなかった。ランズダウン外相は『新航路 (new course)』を打ち出していたが、彼の政策の最終的な帰結がどうなるかについて明確な考えを持っていなかった。イギリスの政策の大きな変化は、単一ではなく、多数の小さな決定の帰結であった」⁽⁷¹⁾

一方、ネオクラシカル・リアリズムの理論を用いるのであれば、国際システムの構造的状況を明らかにし、当時のイギリスにどの程度の選択の幅があったのかを検討するところから分析が始まる。たとえば、戦争相関研究プロジェクトの国力複合指標 (composite index of national capabilities) を用いて諸大国の国力を数値として示し、当時の国際システムの極構造や、相対的地位が低下していたとされるイギリスと他の大国との具体的な格差を把握することもできるし、⁽⁷²⁾ これらのデータを元に、当時のイギリスにとって望ましい同盟行動について検討することもできる (たとえば、三国同盟に加入する形で、ドイツと同盟することの是非など)。次に、こうした国際システム

の状況の中で特定の戦略的選択がなされた理由を、国内要因を用いて説明することになる。この例の場合、政府内の権力構造や、ポーア戦争による国内の疲弊状況（政府の資源動員能力との関連）などに焦点が当てられることになる。あるいは、ステイーヴン・ロベルのように、英国内の自由貿易論者と経済的ナショナリストの権力闘争に着目しながら、ドイツやアメリカといった台頭する競合国の通商戦略との対応関係の中で、イギリスの大戦略の変化について論じること⁽⁷³⁾もできる。

一部の歴史家にとっては、便宜的に想定される国際システムの構造が「見えざる手」として指導者の決定に大きな影響を及ぼし、国家行動にも作用するという考え方は、受け入れ難いかもしれない。実際、外交資料を検証してみると、当時の指導者が、現代リアリストが想定する国際システムの構造とは全く異なる国際情勢認識を持っていたという結果が出ることは、決して珍しいことではない。しかし、ここで重要な点は、現代リアリズムの議論では、当事者の認識とは関係なく、国際システムの構造的制約は諸国家（とその国内）に作用すると想定されることである。つまり、ランスダウンやその他の指導者が、明確な政策構想を持っていたかどうかに関係なく、国際システムの制約がイギリス外交に影響を及ぼしていたと考えるということであり、その制約の中で（あるいはその制約に反して）、特定の政策が選択された理由を国内の諸要因から説明するのが、ネオクラシカル・リアリズムの事例研究ということになる。

したがって、研究の目的が、指導者の思考過程を再現することや政策決定過程に関する新事実を説明することにあるのであれば、ネオクラシカル・リアリズムの理論だけでは目的を達成することはできない。なぜなら、歴史的事実は、各種の調査を通じて実証的に解明するほかないからである。もちろん、理論を用いて推論することや、新しい解釈を示すことは可能であるし、一次資料調査を実施するネオクラシカル・リアリストの研究も近年では珍しくない。しかしながら、ネオクラシカル・リアリズムの事例研究の主目的は、理論の検証に加えて、理

論枠組を用いて有意な推論や解釈を提示したり、「問い」を発見したり、複雑な現実を単純化して大局的に理解することにあるのであり、一次資料から史実を再構成することにはない点に注意が必要である。

ロバート・ジャービスは、「政治学における成功したリサーチ・プログラムの主な機能は、答を提供することよりも、有益な問いを指摘することである」と述べている。⁷⁴ ネオクラシカル・リアリズムの諸理論によって、国際環境と各国の政治状況の大局的な構図を把握することが可能となり、その上、重要な「問い」の発見や歴史研究の通説とは異なる「新解釈」の提示にも役立つのであれば、たとえ新事実を解明することはできなくても、国際政治の分析道具としての役割は十分に果たしているということになる。

おわりに

ネオクラシカル・リアリズムという名称が提示されてから、すでに十年以上が経過し、この学派の研究もそろそろ成熟期に入ったと思われる。しかしながら、まだまだ多くの課題が残されていることは、ネオクラシカル・リアリストも認識している。たとえば、社会科学の世界では、理論の予測（説明）の有効期限の長さ（time horizon）という問題が昔から指摘されているが、ネオクラシカル・リアリストにとっても頭を悩ます問題である。あるいは、事例研究に関連して、分析者が観察対象となる事象の結末を知っていることにより、研究の中で、その事象が起こる蓋然性を高く見積もりすぎてしまう（偶然性という要素が軽視されてしまう）傾向が強いという問題も、研究を進める際に留意すべきことであろう。さらには、各国の指導者や利益集団を、実際以上に明確な目的を持つアクターとして扱ってしまうこと⁷⁵で、分析が予定調和的になってしまうことも、歴史学にも共通する問題として学界で指摘されている。これらは、ほんの一例でしかないが、こうした学界での重要課題に対して、ネ

オクラシカル・リアリストの研究が率先して解決策を示すことに成功しているかという点、現状ではそうとはいえないだろう。

それでは、話をネオクラシカル・リアリズムの理論的な発展に絞った場合、どのような課題があるのだろうか。ここでは、この学派を発展させるために非常に重要だと思われる二つの課題を提示することで、本稿を結ぶことにしたい。

第一の課題は、国際システムに関する基礎的な研究を推進することである。これまでのところ、多くのネオクラシカル・リアリストは、実質的に、ウォルツのネオリアリズムの国際システムに関する分析枠組をほぼ無批判のまま受け入れている。しかしながら、ウォルツの理論が示す均衡化と勢力均衡のメカニズムは、理論と実証の両面でこれまで数多くの批判にさらされており、しかも、ウォルツとその支持者が必ずしも説得力のある反論を展開できていないことには留意すべきである。仮にウォルツの国際システムの理論が決定的に間違っているとすれば、それを利用するネオクラシカル・リアリストの議論の信頼性も大きく損なわれることになる。ミアシャイマー⁽⁷⁷⁾は、地理的要因の導入に踏み切ることで、ウォルツのネオリアリズムとは一線を画した理論を提示しているが、ネオクラシカル・リアリストも、国際システムについて積極的に独自の研究を推進するべきである。

第二の課題は、国家利益の区別や変化について研究を深めることである。ここでの具体的な問題は、理論の中に少なくとも現状維持と現状打破の二種類の国家利益を想定することや、国家利益の形成と変化という観点を理論に含めることの是非についてである。こうした国家利益の問題が、ネオクラシカル・リアリズムの範疇に入るということは、現代リアリストの間でも認識されているが、現状では実際にこの問題に正面から取り組む研究者は非常に少ない⁽⁷⁹⁾。その理由として考えられるのは、複数の国家利益を想定することで理論の簡潔性が損なわれることや、ネオリアリズムの国際システムに関する枠組を直接的に利用できなくなる⁽⁷⁸⁾ことである。しかしながら、

ナポレオン期のフランスやヒトラー率いるナチス・ドイツの例を引くまでもなく、現状打破を企図する大国とそれを防ぎ現状維持をはかる大国の対立が、国際政治の趨勢を大きく変動させることは歴史上珍しいことではない。国家利益の区別と変化という問題は、戦争と平和の問題を考える上でも重要であり、古典的リアリズムとネオクラシカル・リアリズムの視点をより緊密に結びつけるという意味でも、重点的に取り組むべき課題であるといえよう。⁽⁸⁰⁾

(1) たとえば、二〇〇九年にも『国際理論 (International Theory)』誌が創刊された。また、北米の国際研究学会 (ISA) は、この十年で三つの新雑誌を立ち上げており、現在、ISAは五種類の学会誌を有し、さらには『国際相互作用 (International Interaction)』誌の共同発行元にもなっている。

(2) 現代リアリズムの研究動向については、以下も参照。赤木完爾・今野茂充「冷戦後の国際関係理論(二)」『法学研究』第七三巻第一一号(二〇〇〇年十一月)二五一―五二頁。今野茂充「リアリズムの十年」『法学政治学論究』第五三号(二〇〇二年六月)三三九―三九〇頁。Jeffrey W. Taliaferro, “Security Seeking Under Anarchy: Defensive Realism Revisited,” *International Security*, Vol. 25, No. 3 (Winter 2000/01), pp. 128–161; Charles L. Glaser, “The Necessary and Natural Evolution of Structural Realism,” in John A. Vasquez and Colin Elman, eds., *Realism and the Balancing of Power: A New Debate* (Upper Saddle River: Prentice Hall, 2003), pp. 266–279; Randall L. Schweller, “Progressiveness of Neoclassical Realism,” in Colin Elman and Miriam Fendius Elman, eds., *Progress in International Relations Theory: Appraising the Field* (Cambridge: MIT Press, 2003), pp. 311–347.

(3) 一例として以下を参照。Norrin M. Ripsman, *Peacemaking by Democracies: The Effect of State Autonomy on the Post-World War Settlements* (University Park: Pennsylvania State University Press, 2002); Jennifer Sterling-Folker, *Theories of International Cooperation and the Primacy of Anarchy: Explaining U.S. International Monetary Policy-Making after Bretton Woods* (Albany: State University of New York Press, 2002); Steven E.

- Lobell, *The Challenge of Hegemony: Grand Strategy, Trade, and Domestic Politics* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 2003); Jeffrey W. Taliaferro, *Balancing Risks: Great Power Intervention in the Periphery* (Ithaca: Cornell University Press, 2004); Randall L. Schweller, *Unanswered Threats: Political Constraints on the Balance of Power* (Princeton: Princeton University Press, 2006); Christopher Layne, *The Peace of Illusions: American Grand Strategy from 1940 to the Present* (Ithaca: Cornell University Press, 2006); Colin Dueck, *Reluctant Crusaders: Power, Culture, and Change in American Grand Strategy* (Princeton: Princeton University Press, 2006); Jason W. Davidson, *The Origins of Revisionist and Status-Quo State* (New York: Palgrave Macmillan, 2006).
- (4) 国際関係理論における現代リアリズムとは、多くの場合、社会科学の方法論に準拠し、演繹的に構築されたリアリズム理論のことを指す。ウォルトのネオリアリズム、攻撃的リアリズム、防衛的リアリズムはもとより、本稿の主題であるネオクラシカル・リアリズムも現代リアリズムに分類されること一般的である。
- (5) ネオクラシカル・リアリズムの最新の研究状況については、以下も参照。Steven E. Lobell, Norrin M. Ripsman, and Jeffrey W. Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy* (Cambridge: Cambridge University Press, 2009).
- (6) Jeffrey W. Legro and Andrew Moravcsik, "Is Anybody Still a Realist?" *International Security*, Vol. 24, No. 2 (Fall 1999), pp. 5-55.
- (7) 歴史学と政治学の研究方法論の共通点と相違については、以下を参照。Colin Elman and Miriam Fendius Elman, eds., *Bridges and Boundaries: Historian, Political Scientists, and the Study of International Relations* (Cambridge: MIT Press, 2001); Alexander L. George and Andrew Bennett, *Case Studies and Theory Development in the Social Sciences* (Cambridge: MIT Press, 2005); Marc Trachtenberg, *The Craft of International History: A Guide to Method* (Princeton: Princeton University Press, 2006); Gary Goertz and Jack S. Levy, eds., *Explaining War and Peace: Case Studies and Necessary Condition Counterfactuals* (London: Routledge, 2007).
- (8) Jack Snyder, *Myths of Empire: Domestic Politics and International Ambition* (Ithaca: Cornell University

- Press, 1991), pp. 11-12, 12 n36. 分類の際にこのライターが参照した文献は以下の通り。Kenneth N. Waltz, *Theory of International Politics* (Reading, Mass.: Addison-Wesley, 1979); Stephen M. Walt, *The Origins of Alliances* (Ithaca: Cornell University Press, 1987); John J. Mearsheimer, “Back to the Future: Instability in Europe after the Cold War,” *International Security*, Vol. 15, No. 1 (Summer 1990), pp. 5-56. 一九九〇年代中盤以降、積極的にリマリスムという名称が使用されることは少なからず、攻撃的リマリスムという名称が定着した。
- (5) David Baldwin, ed., *Neorealism and Neoliberalism: The Contemporary Debate* (New York: Columbia University Press, 1993).
- (9) Richard Rosecrance and Arthur A. Stein, eds., *The Domestic Bases of Grand Strategy* (Ithaca: Cornell University Press, 1993). 国交関係の進展や悪化した課題についてズレや参照。Matthew Evangelista, “Domestic Structure and International Change,” in Michael W. Doyle and G. John Ikenberry, eds., *New Thinking in International Relations Theory* (Boulder: Westview Press, 1997), pp. 202-228.
- (11) Snyder, *Myths of Empire*, p. 13.
- (12) Fareed Zakaria, “Realism and Domestic Politics: A Review Essay,” *International Security*, Vol. 17, No. 1 (Summer 1992), pp. 177-198, at 178. 参考。Ethan B. Kapstein, “Is Realism Dead? The Domestic Sources of International Politics,” *International Organization*, Vol. 49, No. 4 (Autumn 1995), pp. 751-774.
- (13) Randall L. Schweller, “Bandwagoning for Profit: Bringing the Revisionist State Back In,” *International Security*, Vol. 19, No. 1 (Summer 1994), pp. 72-107; Randall L. Schweller, “Neorealism’s Status-Quo Bias: What Security Dilemma?” in Benjamin Frankel, ed., *Realism: Restatement and Renewal* (London: Frank Cass, 1996), pp. 90-121.
- (14) John J. Mearsheimer, *Tragedy of Great Power Politics* (New York: W. W. Norton, 2001), p. 33.
- (15) *Ibid.*, p. 21.
- (16) Waltz, *Theory of International Politics*, p. 121.
- (17) *Ibid.*, pp. 121-123.

- (18) 全ての研究者が、ウォルツが定式化した「国際政治の理論」と「対外政策の理論」という区別を有益とみなしているわけではない。たとえば、ミアシャイマーは、自身の理論であれば国際政治の帰結も対外政策も説明できるとしており、「国家の合理性を仮定して理論構築しているリアリストは、国際政治の理論と対外政策の理論を区別する必要がなく」と論じている。John J. Mearsheimer, “Reckless States and Realism,” *International Relations*, Vol. 23, No. 2 (June 2009), pp. 241-256, at 246. また、シェウエラーとの区別の必要性に関するウォルツの議論の論理的根拠は脆弱であり、むしろ理論の検証と評価に関する混乱の主要な原因になっつると論じている。Schweller, “The Progressiveness of Neoclassical Realism,” p. 321.
- (19) Gideon Rose, “Neoclassical Realism and Theories of Foreign Policy,” *World Politics*, Vol. 51, No. 1 (October 1998), pp. 144-172.
- (20) *Ibid.*, 146.
- (21) William C. Wohlforth, *The Elusive Balance: Power and Perceptions during the Cold War* (Ithaca: Cornell University Press, 1993); Thomas J. Christensen, *Useful Adversaries: Grand Strategy, Domestic Mobilization, and Sino-American Conflict, 1947-1958* (Princeton: Princeton University Press, 1996); Randall L. Schweller, *Deadly Imbalances: Tripolarity and Hitler's Strategy for World Conquest* (New York: Columbia University Press, 1998); Fareed Zakaria, *From Wealth to Power: The Unusual Origins of America's World Role* (Princeton: Princeton University Press, 1998).
- (22) ネオクラシカル・リアリズムが何を意味するのかわ不明瞭だという批判は、比較的最近まで存在した。たとえば、リンソン・ワグナーは、相互に関係のない研究書をひとつくりに論じるためにローズが便宜的に提示した名称でしかなく、否定的な評価を下している。R. Harrison Wagner, *War and the State: The Theory of International Politics* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 2007), p. 51.
- (23) Mearsheimer, *The Tragedy of Great Power Politics*.
- (24) *Ibid.*, pp. 19-21.
- (25) ウォルツの理論とシステムレベルの防衛的リアリズムを明確に区別している論考として、以下を参照。なお、グ

レーザーは、攻撃的リアリズムと防衛的リアリズムは構造的リアリズム（システム理論）でもよく似たと主張している。Glaser, “The Necessary and Natural Evolution of Structural Realism,” in Vasquez and Elman, eds., *Realism and the Balancing of Power*, pp. 266-279. 上の点については、今野「リアリズムの十年」三六五―三六九、三七一―三七三頁を参照。

(89) Colin Elman, “Expanding Offensive Realism: The Louisiana Purchase and America’s Rise to Regional Hegemony,” *American Political Science Review*, Vol. 98, No. 4 (November 2004), pp. 563-576; Keir A. Lieber, *War and the Engineers: The Primacy of Politics over Technology* (Ithaca: Cornell University Press, 2005); Joao Resende-Santos, *Neorealism, States, and the Modern Mass Army* (Cambridge: Cambridge University Press, 2007).

(90) Campbell Craig, *Glimmer of a New Leviathan: Total War in the Realism of Niebuhr, Morgenthau, and Waltz* (New York: Columbia University Press, 2003); Sean Molloy, *The Hidden History of Realism: A Genealogy of Power Politics* (New York: Palgrave Macmillan, 2006).

(91) Brent J. Steele, “Eavesdropping on Honored Ghosts: From Classical to Reflexive Realism,” *Journal of International Relations and Development*, Vol. 10, No. 3 (September 2007), pp. 272-300. ストールは、その三冊や「国内的リアリズム」の図を引上げている。Anthony Lang, *Agency and Ethics: The Politics of Military Intervention* (Albany: SUNY Press, 2002); Richard Ned Lebow, *The Tragic Vision of Politics: Ethics, Interests and Orders* (Cambridge: Cambridge University Press, 2003); Michael Williams, *The Realist Tradition and the Limits of International Relations* (Cambridge: Cambridge University Press, 2005). 関連する研究については、参照。Ioannis D. Evrigenis, *Fear of Enemies and Collective Action* (Cambridge: Cambridge University Press, 2008); Vibeke Schou Tjalve, *Realist Strategies of Republican Peace: Niebuhr, Morgenthau, and the Politics of Patriotic Dissent* (New York: Palgrave Macmillan, 2008); Duncan Bell, ed., *Political Thought and International Relations: Variations on a Realist Theme* (Oxford: Oxford University Press, 2009). 内省性の「対外政策の理論」としてのリアリズムについては、Samuel Barkin, “Realism, Prediction, and Foreign Policy,” *Foreign Policy Analysis*,

Vol. 5, Issue 3 (July 2009), pp. 233–246, at 242–245 (下線部分を参照)。

- (28) 一説としてミトを参照。G. John Ikenberry, ed., *America Unrivaled: The Future of the Balance of Power* (Ithaca: Cornell University Press, 2002); Stephen M. Walt, *Taming American Power: The Global Response to U.S. Primacy* (New York: W. W. Norton, 2005); Christopher Layne and Bradley A. Thayer, *American Empire: A Debate* (New York: Routledge, 2007); Stephen G. Brooks and William C. Wohlforth, *World Out of Balance: International Relations and the Challenge of American Primacy* (Princeton: Princeton University Press, 2008); Robert Jervis, “Unipolarity: A Structural Perspective,” *World Politics*, Vol. 61, No. 1 (January 2009), pp. 188–213.
- (29) ソフトな均衡化プロセスを均衡化プロセスの文脈を参照。Robert A. Pape, “Soft Balancing against the United State,” *International Security*, Vol. 30, No. 1 (Summer 2005), pp. 7–45; T. V. Paul, “Soft Balancing in the Age of U.S. Primacy,” *International Security*, Vol. 30, No. 1 (Summer 2005); Keir A. Lieber and Gerard Alexander, “Waiting for Balancing: Why the World Is Not Pushing Back,” *International Security*, Vol. 30, No. 1 (Summer 2005), pp. 109–139. また、勢力均衡が作動しなかった世界史上の事例に関する研究としてミトを参照。Victoria Tin-bor Hui, *War and State Formation in Ancient China and Early Modern Europe* (Cambridge: Cambridge University Press, 2005); Arthur M. Eckstein, *Mediterranean Anarchy, Interstate War, and the Rise of Rome* (Berkeley: University of California Press, 2006); Stuart J. Kaufman, Richard Little and William C. Wohlforth, eds., *The Balance of Power in World History* (New York: Palgrave Macmillan, 2007)。これらの研究では、勢力均衡的存在が否定されているのではなく、いくつかの条件が揃って、地域レベルにおいては勢力均衡の制約を打ち破って覇権を達成するプロセスが可能であることが示されている。
- (30) Jeffrey W. Taliaferro, Steven E. Lobell, and Norrin M. Ripsman, “Introduction: Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy,” in Lobell, Ripsman, and Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, p. 10.
- (31) *Ibid.*, p. 21.

- (33) 前述のように、すべての論者が「国際政治の理論」と「対外政策の理論」の区別を受け入れているわけではないが、多くのネオクラシカル・リアリストはこの区別を受け入れている。
- (34) Aaron L. Friedberg, *The Wary Titan: Britain and the Experience of Relative Decline, 1895-1905* (Princeton: Princeton University Press, 1988), p. 8.
- (35) Norrin M. Ripsman, Jeffrey W. Taliaferro, and Steven E. Lobell, "Conclusion: The State of Neoclassical Realism," in Lobell, Ripsman, and Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, p. 281.
- (36) Schweller, *Unanswered Threats*, pp. 9-13, 46-68. なお、シムウエラーは均衡化を「①適切な均衡化 (appropriate balancing)」「②過剰均衡化 (over balancing)」「③非均衡化 (non balancing)」「④過小均衡化 (under balancing)」の四つに分類している。彼によれば「①は国際システムの規定にしたがった通常の均衡化」「②は実際には脅威ではない相手国を警戒して、過剰な軍備拡張を実施すること」「③は、バンドワゴンや不作為などの均衡化以外の行動」「④は危険で宥和不可能な侵略国を抑止するために均衡化する必要があるのに、それができないか不十分な場合を指す。
- (37) Dueck, *Reluctant Crusaders*.
- (38) Taliaferro, *Balancing Risks*.
- (39) Jeffrey W. Taliaferro, "Neoclassical Realism: The Psychology of Great Power Intervention," in Jennifer Sterling-Folker, ed., *Making Sense of International Relations Theory* (Boulder: Lynne Rienner, 2006), pp. 38-53, at 51.
- (40) Richard Ned Lebow, "The Long Peace, the End of the Cold War, and the Failure of Realism," in Richard Ned Lebow and Thomas Risse-Kappen, eds., *International Relations Theory and the End of the Cold War* (New York: Columbia University Press, 1995), pp. 23-56, at 24.
- (41) John A. Vasquez, "The Realist Paradigm and Degenerative versus Progressive Research Programs: An Appraisal of Neotraditional Research on Waltz's Balancing Proposition," *American Political Science Review*, Vol. 91, No. 4 (December 1997), pp. 913-918. ラカーニッシュの「科学的研究プログラムの方法論」については、以下

- 李海平: Colin Elman and Miriam Fendius Elman, "Lessons from Lakatos," in Elman and Elman, eds., *Progress in International Relations Theory*, pp. 21-68.
- (42) Legro and Moravcsik, "Is Anybody still a Realist?"
- (43) *Ibid.*, pp. 6-7.
- (44) *Ibid.*, p. 6.
- (45) *Ibid.*, pp. 7-11.
- (46) *Ibid.*, pp. 9-10.
- (47) *Ibid.*, pp. 11-18.
- (48) *Ibid.*, pp. 10-11.
- (49) *Ibid.*, pp. 19-22.
- (50) *Ibid.*, p. 24.
- (51) *Ibid.*, p. 28.
- (52) Joseph M. Grieco, "Anarchy and the Limits of Cooperation: A Realist Critique of the Newest Liberal Institutionalism," in Baldwin, ed., *Neorealism and Neoliberalism*, pp. 116-140.
- (53) Stephen Van Evera, *Causes of War: Power and the Roots of Conflict* (Ithaca: Cornell University Press, 1999).
- (54) Legro and Moravcsik, "Is Anybody still a Realist?" p. 46.
- (55) Peter D. Feaver, Gunther Helman, Randall L. Schweller, Jeffrey W. Taliaferro, William C. Wohlforth, Jeffrey Legro, and Andrew Moravcsik, "Correspondence: Brother, Can You Spare a Paradigm? (Or Was Anybody Ever a Realist?)" *International Security*, Vol. 25, No. 1 (Summer 2000), pp. 165-193, at 174.
- (56) Brian Rathbun, "A Rose by Any Other Name: Neoclassical Realism as the Logical and Necessary Extension of Structural Realism," *Security Studies*, Vol. 17, No. 2 (April 2008), pp. 294-321, at 296 and 307.
- (57) Feaver, Helman, Schweller, Taliaferro, Wohlforth, Legro, and Moravcsik, "Correspondence," p. 179.
- (58) Waltz, *Theory of International Politics*, p. 118.

- (65) Feaver, Helman, Schweller, Taliaferro, Wohlforth, Legro, and Moravcsik, "Correspondence," p. 176.
- (66) *Ibid.*, p. 183.
- (67) Legro and Moravcsik, "Is Anybody Still a Realist?" p. 21.
- (68) Rathbun, "A Rose by Any Other Name," p. 297.
- (69) Feaver, Helman, Schweller, Taliaferro, Wohlforth, Legro, and Moravcsik, "Correspondence," p. 185.
- (70) Ripsman, Taliaferro, and Lobell, "Conclusion," in Lobell, Ripsman, and Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, p. 290.
- (71) 古典的リアリズムとネオクラシカル・リアリズムの違いについては、以下を参照：Taliaferro, Lobell, and Ripsman, "Introduction," in Lobell, Ripsman, and Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, pp. 14-16, 19-20.
- (72) 注(6)を参照。
- (73) Trachtenberg, *The Craft of International History*, p. 33.
- (74) ジョン・L・キヤネイス（浜林正夫・柴田知薫子訳）『歴史の風景——歴史家はどうのまじりに過去を描くのか』（大月書店、二〇〇四年）七一頁。
- (75) Trachtenberg, *The Craft of International History*, pp. 32, 37-38.
- (76) *Ibid.*, p. 38.
- (77) J. A. S. Grenville, *Lord Salisbury and Foreign Policy: The Close of the Nineteenth Century* (London: Athlone Press, 1964), p. 434.
- (78) J. David Singer, Stuart Bremer, and John Stuckey. "Capability Distribution, Uncertainty, and Major Power War, 1820-1965," in Bruce Russett, ed., *Peace, War, and Numbers* (Beverly Hills: Sage, 1972), pp. 19-48.
- なお、国力複合指標のデータは、戦争相関研究プロジェクトのホームページ（<http://correlatesofwar.org/>）からダウンロードできる「国家の物質的能力（National Material Capabilities）」データセット（最新版はバージョン三・〇二）に含まれている。

- (73) Lobell, *The Challenge of Hegemony*.
- (74) Robert Jervis, "Realism, Neoliberalism, and Cooperation: Understanding the Debate," in Elman and Elman, eds., *Progress in International Relations Theory*, pp. 277-309, at 278.
- (75) Clayton Roberts, *The Logic of Historical Explanation* (University Park: Pennsylvania State University Press, 1996), chap. 8; Paul Pierson, *Politics in Time: History, Institutions, and Social Analysis* (Princeton: Princeton University Press, 2004).
- (76) Paul W. Schroeder, "Historical Reality vs. Neo-realist Theory," *International Security*, Vol. 19, No. 1 (Summer 1994), pp. 108-148; Schweller, "Bandwagoning for Profit," ; Paul W. Schroeder, "Why Realism Does Not Work Well for International History (Whether or Not It Represents a Degenerate IR Research Strategy)," in Vasquez and Elman, eds., *Realism and the Balancing of Power*, pp. 114-127; Kaufman, Little, and Wohlforth, eds., *The Balance of Power in World History*.
- (77) Mearsheimer, *The Tragedy of Great Power Politics*.
- (78) Taliaferro, Lobell, and Ripsman, "Introduction," in Lobell, Ripsman, and Taliaferro, eds., *Neoclassical Realism, the State, and Foreign Policy*, p. 31, n84.
- (79) 数少ない研究としては、シユウエラーやデビッドソンの研究がある。現状維持国家と現状打破国家の対峙という視点を現代リアリズムに再導入する契機を作った点で、シユウエラーの研究は画期的であるが、彼の理論には国家利益の変化という観点が抜けている。また、彼の現状維持国家と現状打破国家の定義には、整合性という面で問題がある。Schweller, *Deadly Imbalances*, pp. 15-26。一方、デビッドソンは、ウォルフアーズの定義を援用して、①領土、②地位、③市場、④イデオロギー、⑤国際法および国際制度の制定と変更、という五つの価値に対する選好という観点から現状維持国家と現状打破国家を再定義している。Davidson, *The Origins of Revisionist and Status-Quo States* p. 13。さらに、今野茂充「国際システムの制約と国家利益——近代日本外交の理論分析」一八六八—一九四五(慶應義塾大学大学院法学研究科博士論文、二〇〇五年)では、領土に対する選好という観点から国家利益を再定義した上で、極の数と極を構成する大国の国家利益の組み合わせから国際システムの構造的制約を再定式化し、国家利

益が変化する国際的・国内的条件についても体系化を試みていよう。

(8) 同様の点は、以下の書評にも指摘されている。Sten Rynning, “The High Cost of Theory in Neoclassical Realism,” *H-Net Reviews in the Humanities & Social Sciences* (July 2009).

<http://www.h-net.org/reviews/showpdf.php?id=24339> (二〇〇九年八月二〇日アクセス)。論者によって多少の言葉は異なるが、古典的リアリストの論議では、現状維持と現状打破という二種類の国家利益が想定される点が一般的であった。Henry A. Kissinger, *A World Restored: Castlereagh, Metternich, and the Problem of Peace, 1812-1822* (Boston Houghton Mifflin, 1957); Arnold Wolfers, *Discord and Collaboration: Essays on International Politics* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1962); Hans J. Morgenthau, *Politics Among Nations: The Struggle for Power and Peace*, 5th ed. (New York: Alfred A. Knopf, 1973); Davidson, *The Origins of Revisionist and Status-quo States*, p. 6.